

小田原の遺跡探訪シリーズ 3

# 千代遺跡群

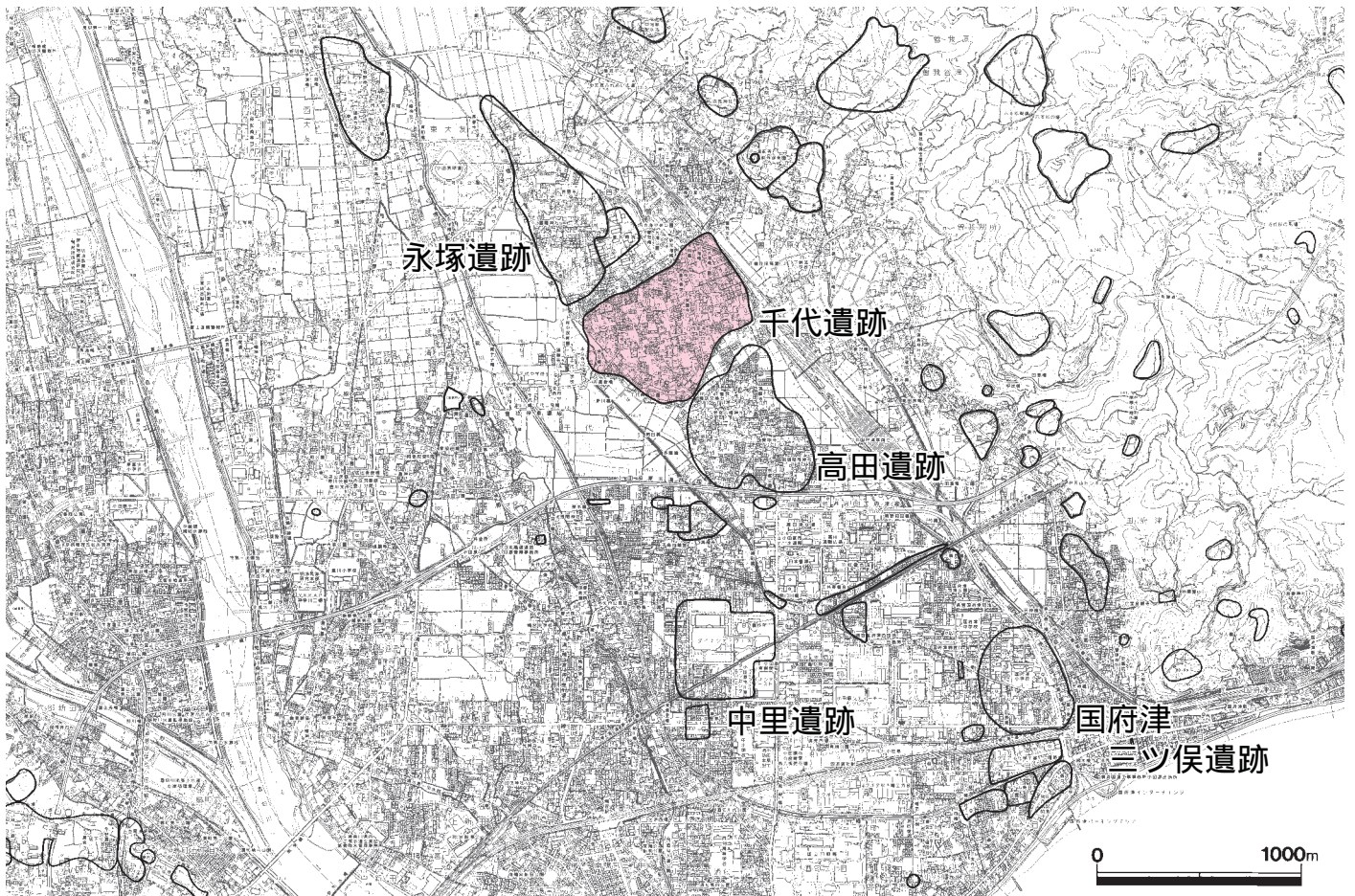
—千代台地にひろがる原始・古代の遺跡—



小田原市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第3号として、小田原市千代に所在する千代遺跡群を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成19年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用公開事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)  
岡本孝之 (慶応義塾大学)、相原俊夫 (玉川文化財研究所)、小池聡 (盤古堂考古学研究所)、中田英・天野賢一 ((財)かながわ考古学財団)、大島慎一・岡潔 (小田原市郷土文化館)、玉川文化財研究所、盤古堂考古学研究所、(財)かながわ考古学財団、川崎市立日本民家園、小田原市文化財保護委員会千代部会、小田原市郷土文化館
- 4 本書の作成は、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課渡辺千尋が担当者となり、同課山口剛志・佐々木健策・小林隆・諏訪間順が補佐しました。本書の構成には、田尾誠敏の協力を、図版の作成には、禹智瑛・海野みね子・大村さえ子・吉田悦子の協力を得ました。



第1図 遺跡周辺位置図 (1/50,000)

[表紙] 千代遺跡群空中写真(南西から) (財)かながわ考古学財団提供

[裏表紙] 千代遺跡出土鬼瓦(小田原市指定重要文化財) 個人蔵、小田原市郷土文化館寄託

# I 千代台地と千代遺跡群

## 1 千代台地と周辺の遺跡

神奈川県小田原市は、市域の中央を酒匂川が流れ、その流域には、足柄平野が広がっています。足柄平野の東側には、不動山（327.7m）などの山々が連なる大磯丘陵があり、その西麓には約10kmにわたり国府津・松田断層が北西－南東方向に走っています。この断層崖だんそうがいに沿うように小河川が流れ、下流域で森戸川となり、相模湾に注いでいます。森戸川と平行するようにJ R御殿場線が走り、森戸川流域には低地が広がっています。

この森戸川の右岸には、約6万年前の箱根火山の大噴火時に形成された、千代台地と呼ばれる標高20～30mほどの台地があります（写真1）。台地は2つの谷によって、北から永塚、千代、高田の3つの小さな台地に分けられ、それぞれの台地の上には、遺跡が全面に存在していることが知られています。本書では、そのうちの中央の台地上にある千代遺跡群（小田原市No.75遺跡）を紹介します。

千代の台地は、断層活動や河川の浸食によって、西側の水田との比高差が10m以上の急な斜面となっている一方、東側は森戸川に向かって緩やかに傾斜しています。千



写真1 小田原厚木道路から千代台地（手前の微高地）を望む（佐々木ほか2004）

代小学校から下曾我駅方面に県道を進むと、大きくS字にカーブをしながら坂を一気に上った後、千代交差点に向かって緩やかな下り坂が続いていることから、この地形を体感することができます。

千代遺跡群は、縄文時代中期の集落跡、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡・墓域、古墳時代後期の集落跡、奈良・平安時代の寺院跡などからなる遺跡の総称です。遺跡は、標高約31mの台地上から標高約18mの台地南側の低地部まで、さまざまな地形に広がり、人びとの生活の痕跡が縄文時代から現在まで多く残されています。

千代遺跡群の周辺には、北側に永塚遺跡群、下曾我遺跡、南側に高田遺跡群、さらに南側には国府津三ツ俣遺跡が展開しています。森戸川流域に位置するこれらの遺跡は、縄文時代以来、それぞれが密接な関わり合いをもって存在していたことが、発掘調査によって明らかになりつつあります。特に奈良・平安時代には、郡家（永塚・下曾我）、寺院（千代）、港（国府津）がセットで造られ、古代足柄の政治的な支配拠点であったと考えられています。このように千代周辺は、有数の規模と内容を兼ね備えた原始・古代の遺跡が分布しており、小田原の歴史を語る上でとても重要な地域といえるでしょう。

## 2 千代遺跡群の発掘調査

千代では、昔から古代瓦の散布していることが知られていました。江戸時代後期に記された『新編相模國風土記稿』に「地中ヨリ古瓦、布目アリ、ナド出ルコトママアリ」との記述があり、現在の千代字南原周辺で布目瓦が出土していたことが分かります。

現在、記録に残っている最初の瓦の採集は、1916（大正5）年のことで、以後、榊原政職や石野瑛、赤星直忠といった著名な研究者たちが現地を訪れ、採集資料を中心に、古代瓦や寺院についての調査研究が行われました。その後、1950～51（昭和25～26）年に、千代中学校の校庭造成のため、県道沿いの千代字北町（第2図-1）で土取り工事が行われました。この際、鬼瓦などを含む大量の瓦の出土や建物の柱の下に据える礎石と考えられるような大石が確認されました。これにより、遺跡の破壊が現実となったことで、研究者の間で危機感が強まりました。

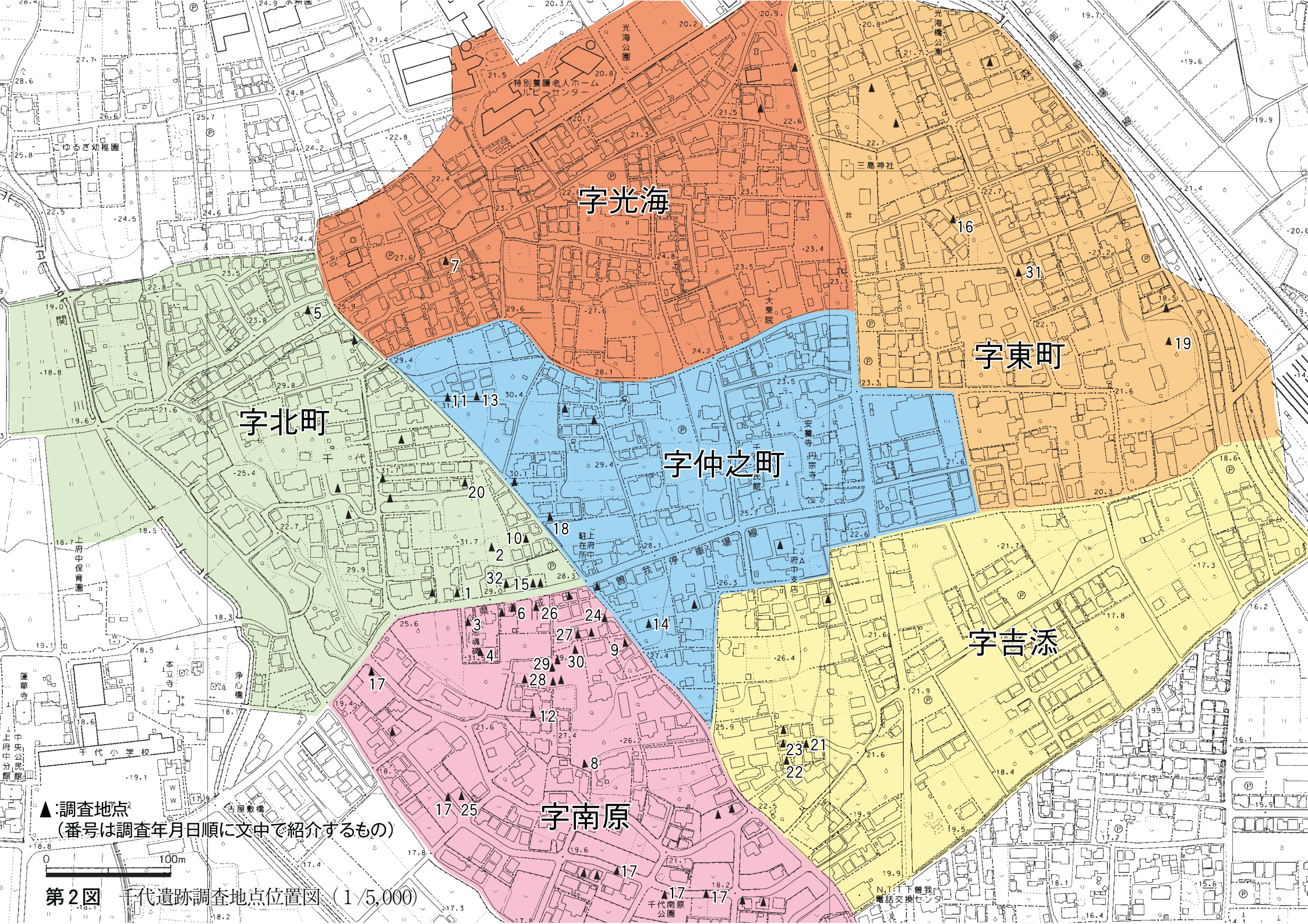
そして、1958（昭和33）年に千代寺院跡の実態解明を目的とした最初の本格的な発掘調査が、神奈川県教育委員会と小田原市教育委員会の合同で実施されました。この千代北町遺跡第I地点（2）の調査には、三上次男（東京大学・考古学）、赤星直忠

(考古学)、大岡實 (横浜国立大学・建築史)、石野瑛 (考古学)、軽部慈恩 (日本大学・考古学) が一線級の研究者が参加していたことから、千代寺院跡に対する学問的な関心の高さが感じられます。この調査の結果については、期待通りの成果が得られなかったこともあったためか、1959 (昭和34) 年の県教育委員会による略報以外に正式な報告が行われていません。考古学的な実態解明が初めて試みられたこの調査は、県内の古代寺院研究の中で、先駆けとなるものでした。また、この調査によって、弥生時代以降の集落が断続的に営まれていたことも明らかとなり、千代の遺跡に新たな発見がもたらされました。

この最初の発掘調査以降、千代遺跡においては、試掘調査も含めると90箇所以上の地点で発掘調査が行われてきました (2008年1月現在)。千代では、遺跡名を大字小字名により「千代南原」<sup>ちよみなみばら</sup>「千代北町」<sup>ちよきたまち</sup>「千代仲ノ町」<sup>ちよなかのちゆう</sup>「千代光海」<sup>ちよこうみ</sup>「千代東町」<sup>ちよひがまち</sup>「千代吉添」<sup>ちよよしぞえ</sup>のように呼んでいます (第2図)。それでは、発掘調査によって明らかになった千代遺跡群の姿を、時代を追って紹介していきましょう。

年代	近 世	中 世	古 代	古墳時代	弥生時代	縄 文 時 代	旧石器時代
六〇〇〇年前							旧石器時代
一五〇〇年前							草創期
五〇〇〇年前							早期
一七〇〇年前頃							前期
二二九							後期
三七							中期
四二四							前期
五三八							後期
六四五							中期
七〇一							前期
七四一							後期
七九四							中期
一一九二							前期
一四六七							後期
一五九〇							中期
一六〇三							前期
一七〇七							後期
一八五三							中期
一八六八							前期
	江戸時代	安土桃山時代	室町時代	南北朝時代	鎌倉時代	平安時代	奈良時代
	飛鳥時代	後期	中期	前期	後期	中期	前期
	倭の五王の時代が始まる	仏教伝来	前方後円墳の築造停止	大化の改新	大宝律令の完成	平城京へ遷都	国分寺建立の詔
	平安京へ遷都	源頼朝、征夷大將軍に任じられる (鎌倉幕府)	足利尊氏、室町幕府を開く	応仁の乱	豊臣秀吉の小田原攻め	徳川家康、江戸幕府を開く	富士山宝永の大噴火
	ペリー来航	五箇条の誓文の公布、明治改元					
	千代台地がかたち作られる	細石刃が日本列島全体に広まる	土器・石鏃の使用が始まる	定住化の進行	気候温暖化により海面が上昇 (縄文海進)	東日本で環状集落がつくられる	北部九州に水稻耕作が伝わる
	鉄器や青銅器の使用が始まる	奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	卑弥呼が魏に使いを送る	前方後円墳の築造が始まる	倭の五王の時代が始まる	仏教伝来	前方後円墳の築造停止
	大化の改新	大宝律令の完成	平城京へ遷都	国分寺建立の詔	平安京へ遷都	源頼朝、征夷大將軍に任じられる (鎌倉幕府)	足利尊氏、室町幕府を開く
	応仁の乱	豊臣秀吉の小田原攻め	徳川家康、江戸幕府を開く	富士山宝永の大噴火	ペリー来航	五箇条の誓文の公布、明治改元	
	谷津山神遺跡	羽根尾貝塚	千代東町遺跡	久野一本松遺跡	前川山王前遺跡	中里遺跡	千代吉添遺跡
	久野下馬下遺跡	千代南原遺跡	久野古墳群	千代北町遺跡	田島横穴墓群	千代寺院跡	国府津三ツ俣遺跡
	永塚下り畑遺跡	下管我遺跡	久野中世集石墓	小船森遺跡	小田原城八幡山古郭	小田原城総構	小田原城
					早川石丁場群	小田原城関連遺跡	

表1 関連年表



字光海

字東町

字北町

字仲之町

字吉添

字南原

▲ 調査地点  
(番号は調査年月日順に文中で紹介するもの)



第2図 千代遺跡調査地点位置図 (1/5,000)

## Ⅱ 千代のあけぼの

### (旧石器時代～縄文時代)

#### 1 定住生活のはじまり

およそ13,000年前まで続いた旧石器時代、人びとは生活の場を移動しながら、狩猟採集を行って暮らしていました。しかし千代では、旧石器時代の人びとが用いた石器は発見されていません。小田原市内の旧石器時代の遺跡は、谷津山神遺跡や つ やまのかみや八幡山古郭本曲輪はちまんやま こかくほんぐるわなどが知られていることから、当時の人びとは、箱根火山から延びる丘陵上を中心に活動していたようです。

千代に人びとの生活の痕跡が発見されるようになるのは、縄文時代早期(10,000～6,000年前)のことです。貝殻や棒状の工具で付けられた文様が特徴である条痕文系土器じょうこんもんけいと呼ばれる縄文時代早期後半の土器片が、千代東町遺跡第Ⅱ地点(19)で約50点見つかっています(写真2)。また、千代南原遺跡第Ⅵ地点(12)では、早期前半の土器片よりいともんけい(撚糸文系土器)がわずかに見ついているほか、千代の北側に位置する永塚下り畑遺跡さがでは、押型文土器おしがたもんとよばれる土器片が見つかっています。このことから、縄文時代の早期には、千代周辺で人びとが活動を始めたことが考えられます。しかし、人びとが暮らしていた住居跡などの遺構は現在までに見つかっておらず、今後の発見が待たれます。また、その後の縄文時代前期(6,000～5,000年前)の人びとの活動の痕跡もほとんどなく、活動の場を千代台地から移したようです。

約4,500年前の縄文時代の中期後半(加曾利E式期かそり)には、千代東町遺跡第Ⅰ地点(16)で竪穴住居が1軒発見され、再び人びとが千代台地で生活するようになります。



写真2 千代東町遺跡第Ⅱ地点出土条痕文系土器

住居からは、煮炊きなどに使用した深鉢型の土器や、クルミやドングリなどを叩き割るために使用した凹石、加工具として使用された磨製石斧などが出土しました（写真3）。これらの道具を用いて、曾我の山々や相模湾で取れた食料などの資源を巧みに利用していたことが想像されます。千代東町遺跡第Ⅵ地点（31）でも縄文時代中期後半の土器片がまとまって出土していることから、台地の北東側に当時の人びとが定着し、生活していたことが考えられます。

同時期の小田原市内では、『小田原の遺跡探訪シリーズ』2で紹介した久野諏訪ノ原丘陵の遺跡で、環状集落と呼ばれる典型的な大規模集落が見つかり、縄文時代中期から後期初頭まで断続的に集落が造られていたことが明らかになっています。一方、千代では住居跡が1軒しか見つかっておらず、環状集落のような大規模な集落とは、タイプの異なる小規模な集落が営まれていたようです。

約4,000～3,000年前の縄文時代後期には、住居跡などの遺構は確認されていません。しかし、千代東町遺跡第Ⅱ地点で、後期（堀之内式期）の土器片が約100点見つかったことから、人びとが生活の場として利用していたことは明らかようです。千代の周辺では、曾我谷津岩本遺跡第Ⅰ地点で敷石住居跡が見つかり、この時期の活動の中心が、森戸川の対岸に位置する曾我丘陵にあったことが推定されます。縄文時代晩期には、再び千代台地における人びとの生活の痕跡が見られなくなり、弥生時代を迎えることとなります。



写真3 千代東町遺跡第Ⅰ地点1号住居跡遺物出土状況（呉地ほか1999）



# Ⅲ 台地にひろがる集落と墓域

## (弥生時代後期～古墳時代前期)

### 1 大規模集落の登場

千代遺跡群の南約1 kmにある<sup>なかざと</sup>中里遺跡は、東日本における最初の本格的な弥生時代集落として全国的に注目を集めました。一方、千代では、中里遺跡が形成された弥生時代中期中葉（<sup>すわだ</sup>須和田式期）とそれに続く中期後葉（<sup>みやのだい</sup>宮ノ台式期）には、土器片がわずかに出土しているだけで、ほとんど生活の痕跡が見つかりません。

しかし、このような状況は3世紀前半の弥生時代後期になると一変し、爆発的に遺構・遺物が増えることとなります。当時の住まいは、縄文時代から普及した、地面に穴を掘りくぼめ、その上に屋根をかけた半地下式の竪穴住居と呼ばれる住居が一般的であったと考えられています。このような竪穴住居の跡は、千代南原遺跡第XⅡ地点（24）や第XⅥ地点（27）など、千代遺跡南側の台地平坦面上を中心とする多くの地点で濃密に見つかりしています（写真4）。このような状況から、長期間にわたり、高い密度で集落が営まれていたということが分かります。



写真4 弥生時代後期の集落出土土器（千代南原遺跡第XⅡ・XⅥ地点）



**写真5** 千代吉添遺跡第Ⅱ地点の環濠（島崎ほか2006）  
取り囲む環濠（溝）が、千代南原遺跡第XV地点（26）、千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点（14）、千代吉添遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ地点（21・22・23）など、台地南側の地点で見つかっています（写真5）。環濠は集落を囲み、区画すると同時に、防御的な役割を持っていたと考えられています。環濠によって囲まれた集落は、環濠集落と呼ばれ、弥生時代の集落のかたちのひとつとして知られています。

このような環濠集落は、地域の中でも規模の大きい集落であることから、拠点的な性格をもっていたと考えられています。また、環濠を造り上げる大規模な土木工事が行われていたことは、その背景に多大な労働力とそれをまとめる政治的な力があつたことが考えられます。環濠がどのように千代の台地上を巡っていたのか全体像を復元することは、今後さらに調査成果を積み重ね検討を行う必要があります。

千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点や千代吉添遺跡の環濠からは、東海地方西部の土器片が在地の土器に混じって出土しています。このような事例は、神奈川県内における一般的な環濠集落の特徴として理解されています。一方で、それらの土器のほかに中部高地系や東京湾岸系の土器群が出土していることも、千代遺跡群の大きな特徴のひとつといえます。千代に環濠集落を築いた人びとは、各地方の人びとと活発な地域間交流を行っていたことが推定され、当時の社会が様々な影響のもとに成り立っていたことが考えられます。

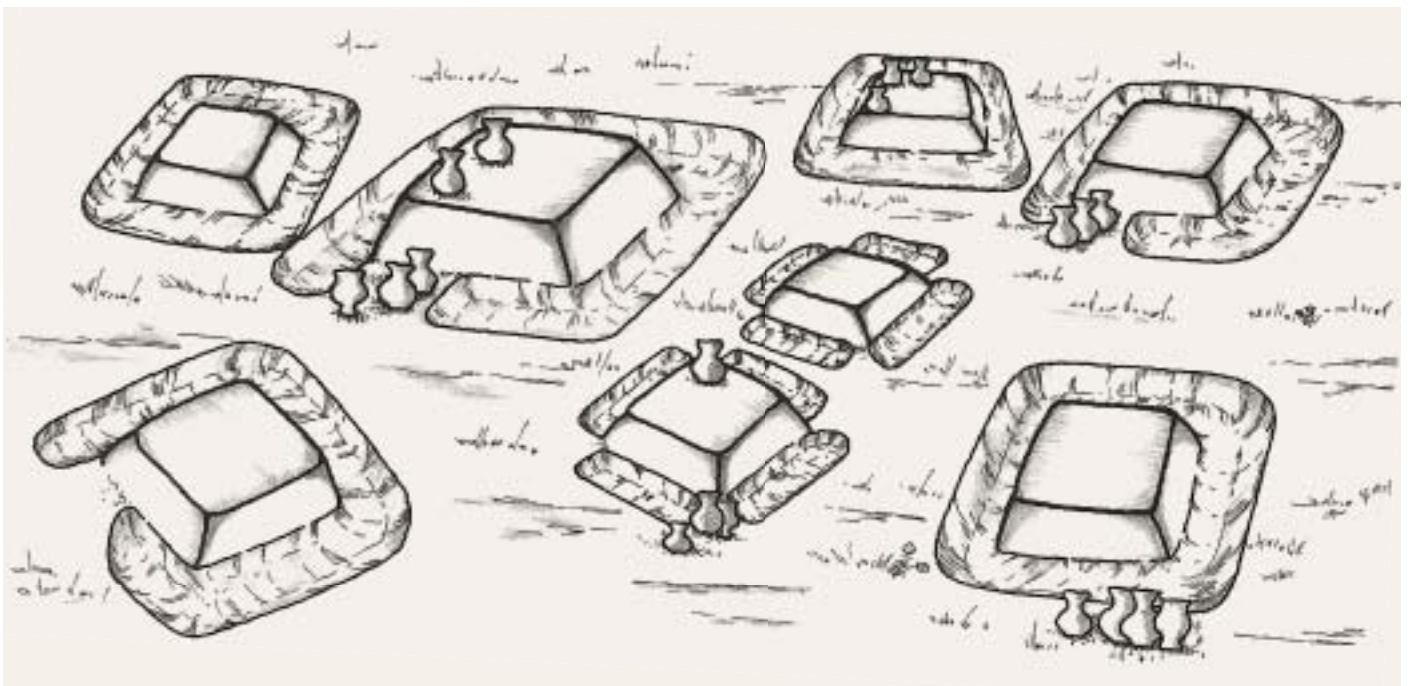
中には、古墳時代前期（3世紀後半～4世紀前半）まで継続的に生活の跡が残されていることから、弥生時代後期以降、人びとは千代の台地の南側を中心に定着し、繰り返し竪穴住居をつくり暮らしていたようです。南向きで日照条件の良い台地上は、南側に作物の栽培に適した低地が広がっており、格好の居住地だったのではないのでしょうか。

千代では、このような集落を

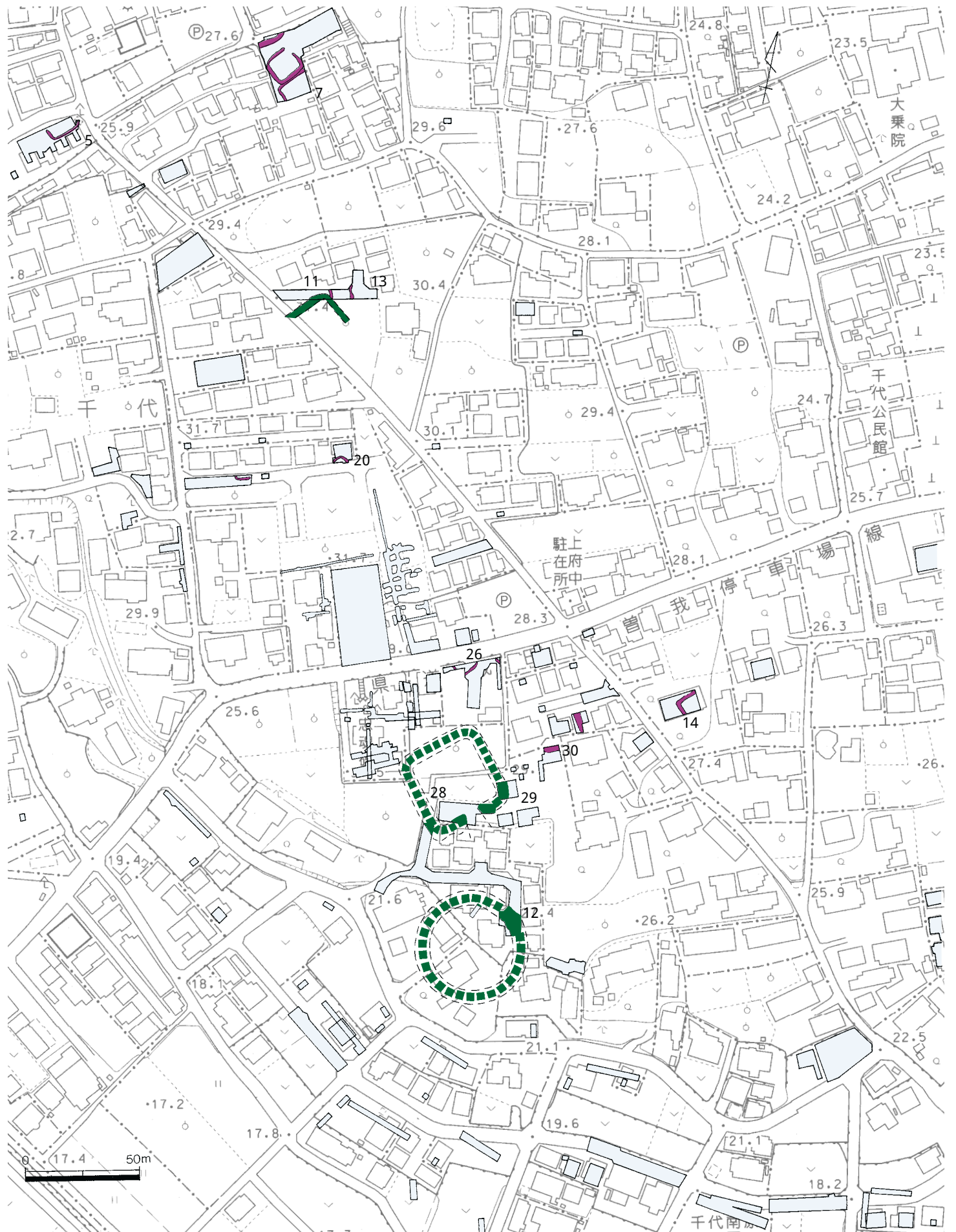
## 2 墓の造営

弥生時代中期～古墳時代前期の関東地方の一般的な墓のかたちは、<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>方形周溝墓と呼ばれるものです(第3図)。方形周溝墓とは、周囲に溝が四角くめぐり、中央に埋葬施設を設けた墓のことです。古墳時代前期に近くなると、中央に土を盛りあげて墳丘を造ったと考えられていますが、削られているものがほとんどで、千代では周囲の溝だけが見つっています。周囲を囲む溝(周溝<sup>しゅうこう</sup>)には、全周するもの、四隅が切れるもの、一隅だけが切れるものなどいくつかのタイプがあることが知られています。

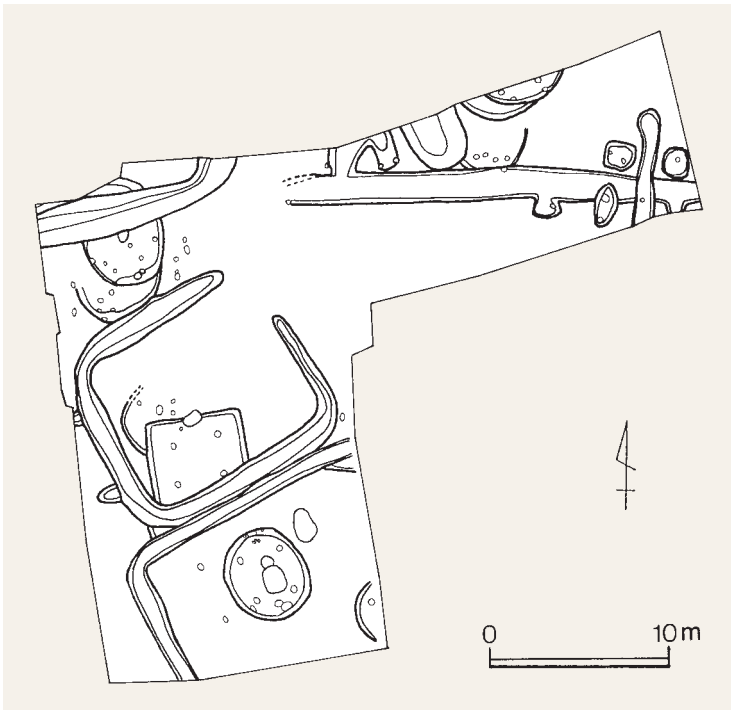
千代では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての方形周溝墓が、千代北町遺跡第Ⅲ地点(5)や千代<sup>こうみばた</sup>光海端遺跡(7)、千代仲ノ町遺跡第Ⅱ・Ⅴ(11・13)地点など、台地北西部に位置する遺跡で見つっています(第4図)。千代光海端遺跡では、溝の方向を揃えた3基の方形周溝墓が見つっています(第5図)。このことから方形周溝墓が、計画的に配置され、群をなしていたことが考えられます。また、千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点(14)では、環濠と方形周溝墓の可能性のある溝が同時期に隣接して存在していたことが明らかになっており、環濠の内側には竪穴住居群が、環濠の外側には方形周溝墓群が広がっていた可能性も推定されます。弥生時代後期以降、千代遺跡は居住域として利用されていた以外に、そこに生活した人びとの墓が造られ、墓域が広がっていました。集落で暮らしていた人びとと墓に葬られた人びとには密接な関係があったことが考えられます。



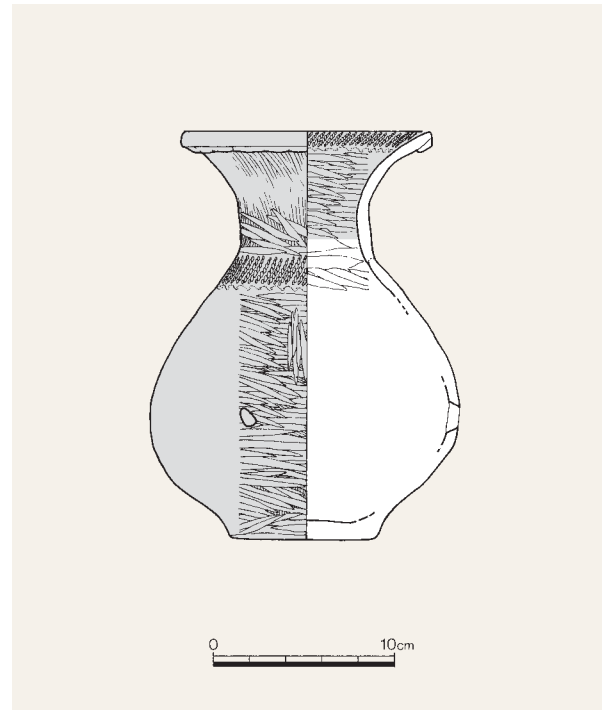
第3図 方形周溝墓群想像図



第4図 千代遺跡の墓域の展開 (1/3,000)



第5図 千代光海端遺跡方形周溝墓 (1/600)  
(杉山1984)



第6図 千代北町遺跡第Ⅲ地点出土  
胴部穿孔土器 (1/6) (諏訪間ほか2001)

千代北町遺跡第Ⅲ地点で見つかった方形周溝墓の周溝からは、焼成後の土器の胴部に穴を開けた土器（胴部穿孔土器）が見つかっています（第6図）。これは、埋葬時や埋葬後に行われた祭祀の際に使われ、その後、周溝に落ち込んだものと考えられます。胴部穿孔土器は、器面に故意に穴を開けることで、日常生活の道具からまつりに使う道具へと変化させたもので、方形周溝墓で行われた祭祀の様子を伝えてくれます。

一方で、方形周溝墓とは異なる大型の墳墓が、古墳時代前期に台地上で確認されるようになります。千代南原遺跡第Ⅵ地点（12）は、円墳あるいは前方後円墳と推定される古墳、千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点や千代南原遺跡第Ⅵ・Ⅸ・ⅩⅢ地点（12・28・29）では、前方後方形周溝墓の可能性のある周溝墓が検出されました（第4図）。このうち、千代南原遺跡第ⅩⅢ地点の周溝からは、古墳時代前期の壺、台付甕、高坏などの土器がまとまって出土しています（写真6・7）。それらの中には、胴部穿孔土器や器面に記号が描かれた土器があり、墓で行われた祭祀に用いられたものと考えられます。また、千代大藪古墳（千代東町遺跡第Ⅱ地点）（19）は、大規模な古墳の可能性のある遺構として注目されています。現在も墳丘状の盛土が残っており、解明が進められています。この時代には、大型の墳墓を造り上げることでできた有力者が千代に存在していたようです。

これらのうち前方後方形周溝墓と呼ばれる墳墓のかたちは、千代で弥生時代後期以

降に造られた伝統的な墓である方形周溝墓から、古墳時代に新たに造られる前方後方墳への過渡期に位置するものとも考えられており、古墳の出現を考える上で、重要なものといえるでしょう。

従来の集団の墓である方形周溝墓群の中から、規模が異なる単独の大型墳墓が出現することは、有力者の墓が特別化し、権力の象徴として墓が意識されるようになったことを示しています。一方で、古墳文化の広がりには、東へと勢力を拡大していくヤマト王権の進出と関連があると考えられています。神奈川県南西部に位置する小田原は、東国への玄関口に位置していることから、その影響を早くから受けていたことが



写真6 千代南原遺跡第X X III地点遺物出土状況

想定されます。古墳が出現し始める時期の大型墳墓が相次いで見つかった千代遺跡は、ヤマト王権の東国進出や東国における古墳時代の始まりを考える上で、大変重要な鍵を握る遺跡といえるでしょう。

千代仲ノ町遺跡第II地点や千代南原遺跡第X IX地点では、それまでの竪穴住居や方形周溝墓などを壊して周溝が造られています。また、千代吉添遺跡第I～IV地点では、弥生時代後期の間に集落を区画していた環濠を廃棄し、環濠のあった場所に新たに竪穴住居を造るようになるなど、土地利用に変化がみられます。時期が経つにつれて、台地上は墓域となり、居住域を南側へ移動させているようです。弥生時代の終末から古墳時代初頭にかけては、社会の変革期にあったことが考えられます。



写真7 千代南原遺跡第X X III地点出土土器

### 3 弥生時代後期～古墳時代前期の生活

#### (1) 出土土器と地域間交流

弥生時代後期にあたる3世紀前半の土器には、千代南原遺跡第V地点(9)、千代仲ノ町遺跡第IV地点(14)などで様々な地域の影響が見られます。地域間で活発な交流があったようです。しかし、資料が断片的であるため、千代台地を含む足柄平野の全体像は、あまり具体的になっていません。

3世紀後半以降の古墳時代前期の土器は、東海地方西部の土器の影響がより強く見られるようになります。さらに近畿系の土器群の影響も見られるようになることが分かっています。千代南原遺跡第IV地点(8)の大型土坑で見つかった土器群は、土器のかたちや作り方が、その特徴をよく表しています(写真8・9)。これらは、神奈川県西部における古墳時代初頭の土器様相を理解するうえで重要な資料であるため、2006年に市指定重要文化財になっています。古墳時代前期には、他地域の土器群の影響が見られることから、地域間の交流が活発に行われていたことが分かります。

#### (2) 最先端技術の導入

千代南原遺跡第IV地点の大型土坑からは土器群と同時に、鉄滓てっさいが見つかったことも注目されます(写真10)。鉄滓とは、鍛冶かじの工程で排出された不純物のかたまりのことで、千代南原遺跡第IV地点出土のものは東日本において最も古い段階のものとし



写真8 千代南原遺跡第IV地点遺物出土状況(諏訪間 劫・1987)



写真9 千代南原遺跡第IV地点出土土器【市指定重要文化財】(諏訪間 劫・1987)

れています。また、千代吉添遺跡第Ⅰ地点（21）では、鉄滓のほかに炉内に送風するために必要な鞆ふいごの羽口はぐちなど、古墳時代前期の鍛冶に関連する遺物がまとまって見つかりました（写真11）。

このような鍛冶に関連する遺物が出土することは、当時の最先端技術であった製鉄技術をすでに保持していた人びとが千代にいたことを示しています。鉄は、従来までの石に代わり、農耕具から武具に至るまで広く利用され、生活に大きな変化をもたらしました。また、それぞれの地域で調達することのできる石材とは異なり、鉄は地域社会の外から手に入れる必要があったため、有力者の交渉能力や経済力などがより一層要求されました。そのため、鉄の生産に関する技術や情報、資源を確保し、管理下に治めることは、当時の有力者にとって、社会的に大きな意味を持っていました。千代の集落には、これらの能力を備えた有力者が存在し、地域社会の中で重要な位置を占めていたことが想定されます。

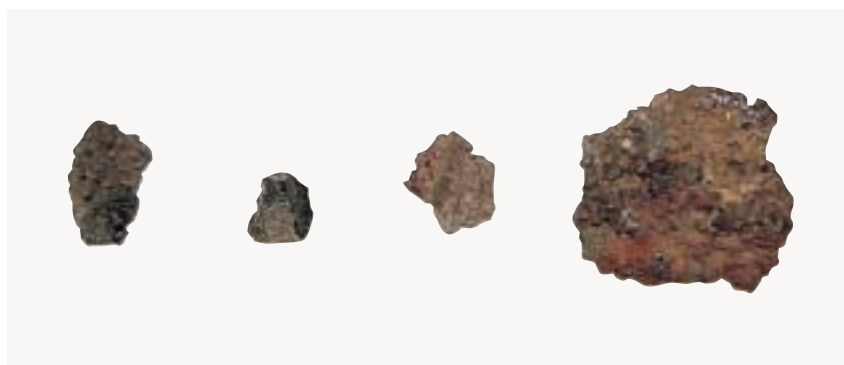


写真10 千代南原遺跡第Ⅳ地点出土鉄滓  
【市指定重要文化財】



写真11 千代吉添遺跡第Ⅰ地点出土  
羽口（島崎ほか2006）

### (3) 特殊な遺物の数々

鉄製品と並ぶ金属製品に、青銅製品せいどうがあります。実用品であった鉄製品に対し、青銅製品はおもに権威や地位を示すための道具やまつりのための道具として使われ、特別なものであったと考えられます。このような青銅製品が、千代遺跡では目立って見つかっています。

千代北町遺跡第Ⅹ地点（20）では、国内で生産された小型の銅鏡どうきょう（小型仿製鏡こがたぼうせいきょう）が出土しました（写真12左）。小田原市内では、ほかに古墳時代前期の出土例として、永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点じゅうげんもんきょうの重圈文鏡、高田南原遺跡第Ⅱ地点しゅもんきょうの珠文鏡の2面が知られています。県内でも希少な小型仿製鏡が、千代遺跡周辺から集中して出土していることは、この地域の重要性を意味しています。



また、<sup>そうしよくひん</sup>装飾品は、指輪として用いられた<sup>どうかん</sup>銅環が、千代光海端遺跡(7)、千代南原遺跡第V地点(9)、同第XⅡ地点でそれぞれ1点ずつ、計3例見つかっています(写真12中)。さらに、腕輪として用いられた<sup>どうくしろ</sup>銅釧が、千代南原遺跡第XⅡ地点(24)で2点出土しています(写真12右)。銅環、銅釧ともに神奈川県内でも30数点しか見つかっていないもので、貴重なものです。また、弓矢の先端につける<sup>どうぞく</sup>銅鏃が、千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点で1点見つかっています。身の部分に小さな孔が複数ある<sup>たこうどうぞく</sup>多孔銅鏃と呼ばれるもので、東海地方に多く見られる特徴的なものです。

千代遺跡は、県内でも青銅製品の出土量が多い遺跡のひとつです。千代が周辺の遺跡に比べ、社会的に重要な位置にあったことを意味しているのかもしれませんが。

また、祭祀に関連するものでは、千代南原遺跡第XⅢ地点(25)で<sup>ほっ</sup>卜骨が見つかっています(写真13)。卜骨とは、占いに使用された動物の骨のことで、骨に熱を加えることで生じるひび割れの方向や形状などによって、占いが行われていたようです。卜骨は、三浦半島で多く出土していますが、神奈川県西部では、初めての検出です。千代南原遺跡第XⅢ地点の卜骨は、シカの骨を用いたもので、台地の南側に捨てられた状態で発見されました。千代の集落で卜骨を用いた儀式が行われていたことを示す重要な資料です。



写真12 千代遺跡出土青銅製品  
(銅鏡：千代北町遺跡第X地点、銅環：千代南原遺跡第V地点、銅釧：千代南原遺跡第XⅡ地点)



写真13 千代南原遺跡第XⅢ地点出土卜骨  
(渡辺ほか2007)

# IV 古墳時代後期の集落の拡大

## 1 古墳時代後期の集落と師長国造

古墳時代中期、千代は人びとの活動の停滞期を迎えますが、古墳時代後期には、千代南原遺跡第Ⅰ地点（4）、第Ⅴ地点（9）、第Ⅵ地点（12）、千代北町遺跡第Ⅳ地点（10）、第Ⅶ地点（15）、第Ⅹ地点（20）、千代仲ノ町遺跡第Ⅱ・Ⅴ地点（11・13）、千代光海端遺跡（7）など多くの地点で住居跡が見つかるように、再び集落としての活気を取り戻します（写真14）。千代における古墳時代後期の集落は、出土土器の分析から、6世紀前半に出現し、6世紀末～7世紀前半頃にもっとも発達し、7世紀後半まで継続して営まれていたことが考えられています（写真15）。

この時代、ヤマト王権はそれぞれの地域の有力な首長しゅちやうを国造くにのみやつこと呼ばれる地方官に任じ、一定の領域を支配させていたと想定されています。ヤマト王権下の相模地方は、大きく3つの支配領域に分かれていたと考えられており、そのうちのひとつが、足柄平野を中心とするもので、師長国造しながのくにのみやつこが治めていました。

国造に任せられるような在地首長ざいちしゅの墓として、6世紀代は塚田2号墳など南足柄市域の古墳が、7世紀には久野2号墳、久野総世寺くのそうせいじ裏古墳など久野諏訪ノ原丘陵の古墳が想定されています。このように6世紀代～7世紀前半頃までの在地首長の墓は、足柄平野の西側



写真14 千代仲ノ町遺跡第Ⅴ地点の竪穴住居跡  
(滝澤ほか2003)

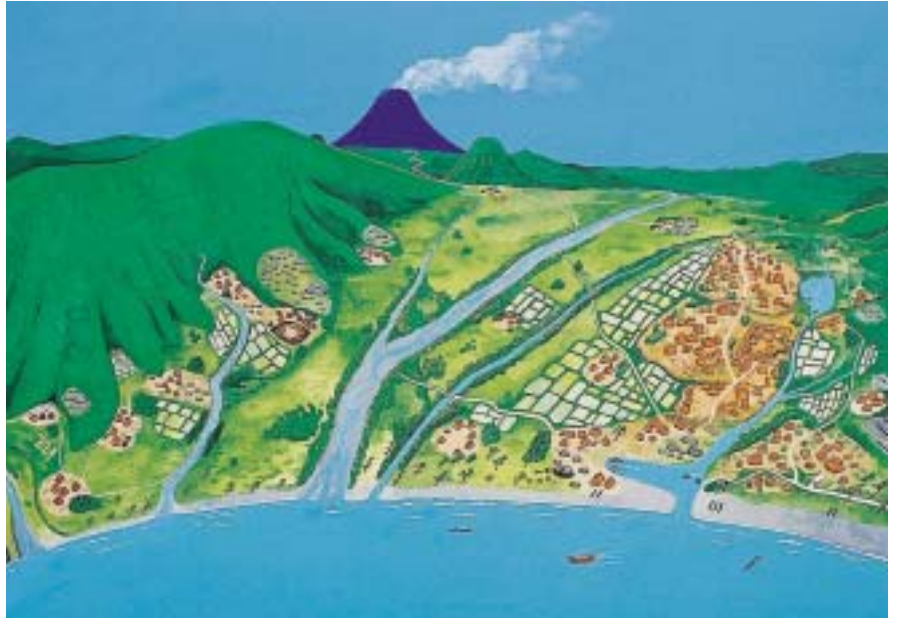


写真15 千代南原遺跡第Ⅴ地点出土土器

に集中しており、その勢力拠点も近くにあったことが想像されています。

7世紀になると、千代遺跡近隣にあたる大磯丘陵の西側では、<sup>たじまおうけつぼぐん</sup>田島横穴墓群のように山の斜面に穴を掘って築く横穴墓が造られ始め、7世紀後半にはかなりの数になります。このことから、7世紀中頃には、足柄平野を治める勢力拠点が、大磯丘陵の西側に移動してきていたと推定されます。千代遺跡も高田遺跡、永塚遺跡などとともに在地首長を支えた集落のひとつとして位置づけられるようです。

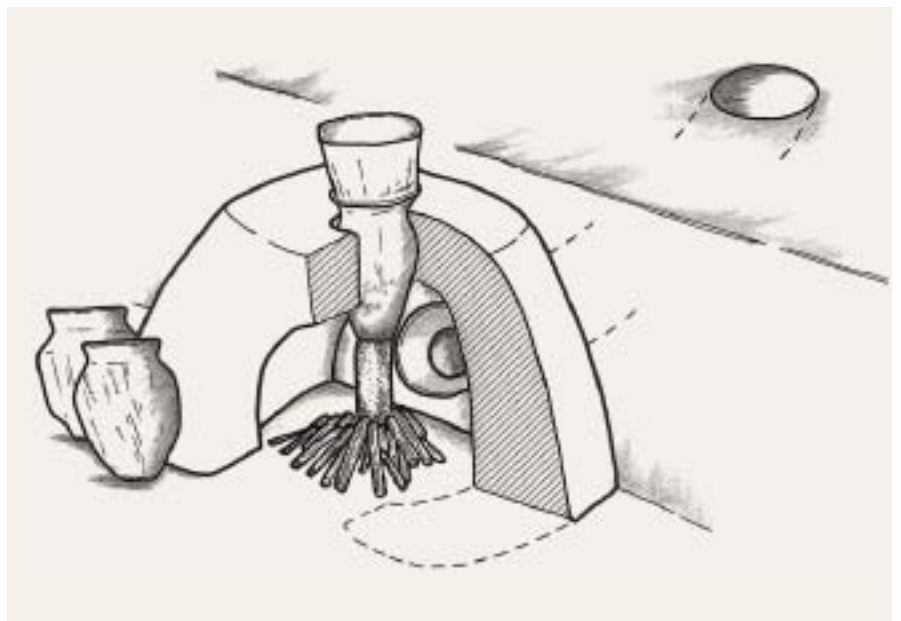
その後、千代の集落は7世紀末に生活の痕跡が乏しくなってしまう。このことは、寺院創建のために、土地の利用に規制が働き、集落が移動したためと考えられます。千代で寺院造営の環境が整えられていく様子がよくわかります。



第7図 古墳時代後期の小田原（画：さかいひろこ）

## 2 古墳時代後期の生活と文化の流入

古墳時代後期も竪穴住居が一般的な住居ですが、煮炊き用の<sup>ちゅうぼう</sup>厨房設備であるカマドを備え付けている点で、古墳時代前期までの竪穴住居と大きな違いがあります（第8図）。カマドは<sup>すえき</sup>須恵器の製作技術などとともに朝鮮半島から伝わったもので、関東地方でも急速に広まり、6世紀には完全に普及するようです。千代でも、古墳時代後期の竪穴住居



第8図 カマドの構造の模式図

は、カマドを備え付けています。千代仲ノ町遺跡第VI地点（18）の竪穴住居は、6世紀前半のもので、カマドが良好な状態で確認されました（写真16）。燃烧部付近から、ほぼ完全な形で甕や甑こしきが見つかっており、当時の生活を生々しく伝えてくれます。

カマドの普及に合わせ、使用される土器にも変化が見られます。甕は、カマドにかけることを意図して細長くなり、また、甑と呼ばれる蒸し器が新しく作られるようになります（写真17）。カマドの導入は、米を煮炊きする方法から、蒸して食べる方法へと食生活の大きな変化を促したと考えられています。こうした朝鮮半島から伝わった文化は、この時代の生活に深く浸透し、変化をもたらしたようです。



写真16 千代仲ノ町遺跡第VI地点のカマド(佐々木劫2002) 写真17 千代仲ノ町遺跡第VI地点カマド出土土器

このほかに、当時の都があった近畿地方で作られた畿内産土師器きないさんはじきとよばれる土器が、千代光海端遺跡（7）や千代北町遺跡第X地点（20）の7世紀後半の竪穴住居から出土しています（写真18）。畿内産土師器は、キメの細かな粘土を使い、ヘラによって暗文あんもんと呼ばれる細かな線を、放射状やらせん状に施している点が特徴的です。仏教とともに伝わってきた金属容器の光沢や質感を真似て、表現していると考えられており、都との交流がうかがわれます。特に、神奈川県内の畿内産土師器の出土は、7世紀には、墳墓や拠点的な集落から出土することが知られていますが、市内では、田島横穴墓から出土したものが有名です。当時の在地の有力者が、ヤマト王権と関わりがあったことを示す重要な資料です。



写真18 千代光海端遺跡出土畿内産土師器 (田尾1999)

# V 千代寺院跡と地方行政

(奈良・平安時代)

## 1 律令国家と地方支配

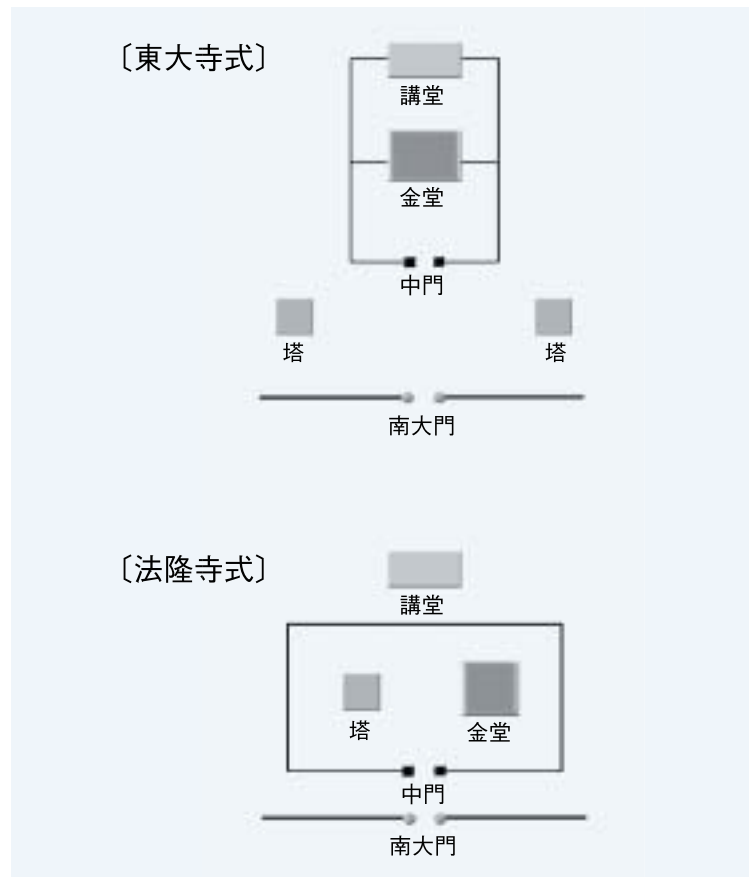
日本で初めての<sup>ほうちこっか</sup>法治国家である律令国家は、645年の大化改新以降、急速に中央集権的な体制作りを進めていきます。701年に施行された大宝令では、国 - 郡 - 里（郷）という地方支配の仕組みが整えられました。国の行政機関である<sup>こくふ</sup>国府（<sup>こくが</sup>国衙）には、中央から<sup>こくし</sup>国司が派遣されました。一方で、郡には役所に相当する<sup>ぐんけ</sup>郡家（<sup>ぐんが</sup>郡衙）が置かれ、在地の有力豪族から<sup>ぐんじ</sup>郡司が任命されて、政治が行なわれました。

千代周辺は、<sup>さがみのくにあしのしもぐん</sup>相模国足下郡に属していました。郡の役所である郡家の近くには、寺院が造営されていることが多く、足下郡の場合は、永塚・下曾我遺跡に足下郡家が、千代遺跡に寺院が造られていたことが考えられています。それでは、実態解明が進む千代寺院跡とその周辺について見ていきましょう。

## 2 千代寺院跡の研究

千代寺院跡の研究は、県内の古代寺院の中でも早くから始まっています。当時の名前が不明であるため、<sup>すた</sup>廃れてしまった寺を意味する<sup>はいじ</sup>廢寺に地名を冠し、「千代廢寺」と呼ばれてきました。近年では、寺院跡であることをより分かりやすくするため、「千代寺院跡」という呼び名を用いており、本書でもそれを採用しています。

研究当初は、採集された瓦の分布状況や周辺に残っている地名などから、東大寺式の<sup>がらん</sup>伽藍配置が想定されていました。伽藍配置とは、寺院の主要な建物の位置関係を類型化した



第9図 東大寺式と法隆寺式の伽藍配置

もので、寺院の年代や機能、系統などを考える基礎となるものです（第9図）。当時、東大寺式の伽藍配置は、国分寺に用いられる伽藍配置であると考えられ、瓦は奈良時代のものと考えられていました。そのため千代の寺院は、8世紀中頃に国家の政策によって造営された寺院である、初期国分寺とする考え方が生まれました。その後、千代の寺院の伽藍配置を東大寺式とする説は、1970年代には多くの研究者によって支持され、受け継がれることとなります。

1980年代に入り、桶巻きづくりという瓦の作り方が知られ、瓦の年代観が古くなる中で、千代の寺院は、国分寺以前の寺である可能性が指摘されるようになりました。その結果、千代の寺院は豪族の<sup>うじでら</sup>氏寺として造営された後、初期国分寺として転用されたとする考え方が生まれます。千代の寺院を国分寺とし、近接する永塚・下曾我遺跡に国府を想定する足柄国府説が成立します。この説は、相模国府の所在や変遷に関する問題とともに、長く議論がされてきました。

しかし、調査・研究が進むにつれ、千代の寺院が法隆寺式の伽藍配置である可能性が指摘される一方で、各地の国分寺の伽藍配置が、必ずしも東大寺式ではないことが



第10図 千代の寺院周辺の様子（画：さかいひろこ）

明らかになってきました。そのため、千代の寺院を国分寺とする説は、成立が難しくなっています。また、近年の発掘調査によって、平塚市<sup>しのみや</sup>四之宮周辺に相模国府が当初から所在したことが明らかになったことで、議論は決着していないものの、足柄に国府が存在した可能性は低くなっています。

現在では、千代の寺院は8世紀初頭に地元の豪族によって造営された寺院であり、永塚・下曾我遺跡に推定される足下郡家とともに、地方支配の拠点であったことが考えられています。格式の高い寺院の造営には、相当の労力が必要とされるため、古墳にかわる新たな権力の象徴であったことが考えられます。

奈良時代の千代周辺は、国府津に港が開かれ水運が発達し、陸路は足柄峠を越える東海道が整備されていたようです。人びとが盛んに往来し、大変な賑わいを見せていたことでしょう。台地上にそびえ立つ寺院は荘厳で、瓦葺きの建物は人びとの目に輝かしく映っていたのではないのでしょうか（第10図）。

その後、千代の寺院は、8世紀末から9世紀前半に修復が行われ、10世紀前半まで存続していたと考えられています。

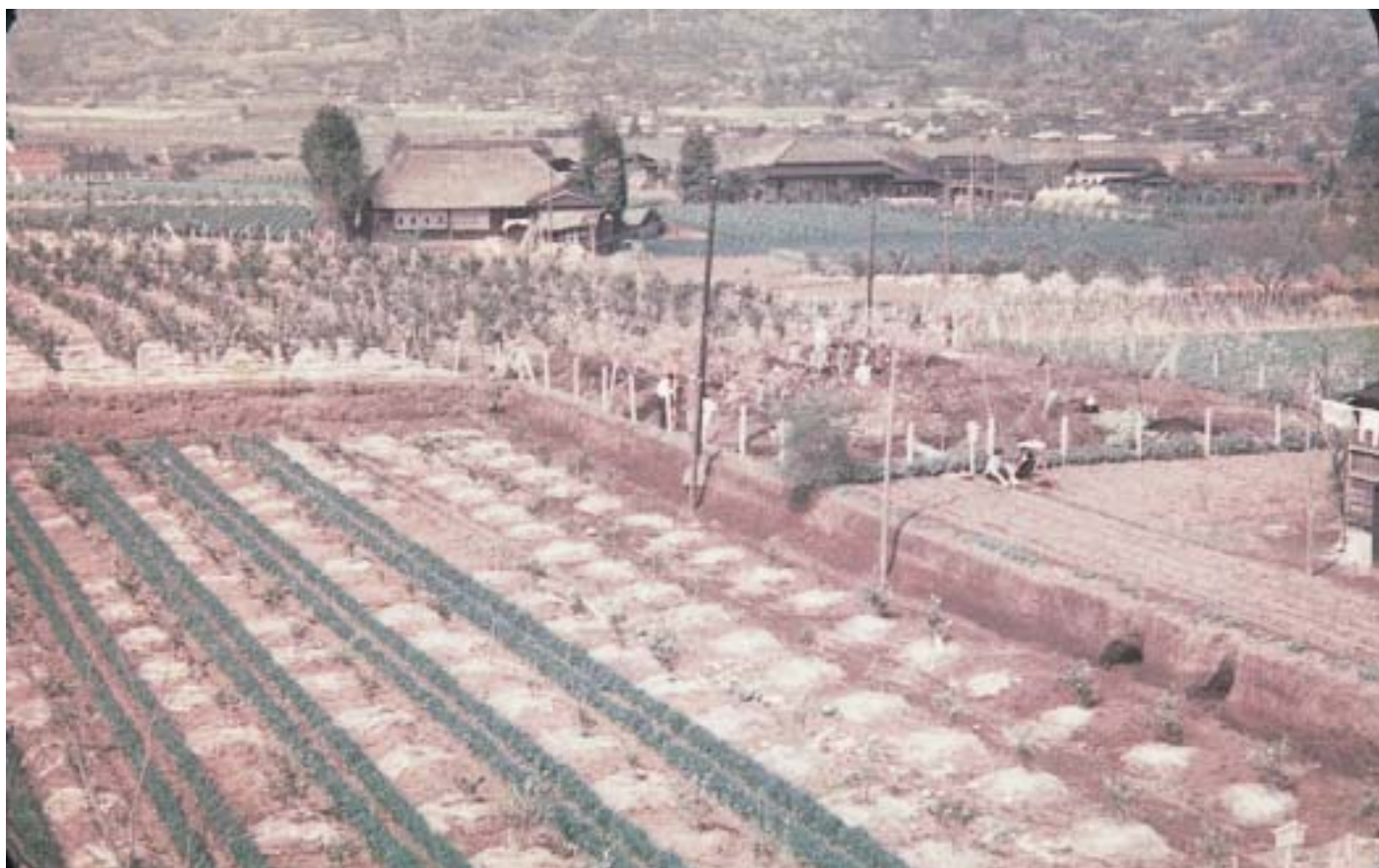


写真19 千代北町遺跡第I地点の調査風景

(川崎市立日本民家園蔵、昭和33年に大岡實氏が忠魂碑西側の火見櫓から北東方向を撮影か)

### 3 発掘調査によって明らかになる千代寺院跡の姿

1958（昭和33）年に行われた最初の千代寺院跡に関する発掘調査（千代北町遺跡第I地点）（2）では、礎石状の大石や瓦の集中が見つかりましたが、礎石は後世に動かされたもので、建物跡の明確な痕跡は見つかりませんでした（写真19）。また、1960（昭和35）年に調査された現在忠魂碑のある台ノ塚と呼ばれる地点（3）や、1970（昭和45）年の千代南原遺跡第I地点（4）でも、瓦や礎石状の大石が検出されましたが、本来の状況をとどめているものは見つかりませんでした。発掘調査によって、寺院の存在は確実視されるものの、なかなか具体的な寺院の構造を明らかにする成果がなく、謎に包まれた状態が続きました。

1990年代に入ると、千代で発掘調査が増えたこともあり、千代寺院跡に関する研究が再び活発化します。1996（平成8）年に調査された千代仲ノ町遺跡第IV地点（14）では、寺域の区画溝と考えられる溝が見つかりました。<sup>こんどう</sup>金堂・塔・講堂などの主要建物を含む伽藍地とその外側の付属施設を囲む区画溝は、寺院の方位や規模を推定する上で、重要な手掛かりとなるものです。また、この地点からは、「厨」と記された<sup>くりや</sup>墨書<sup>ぼくしょ</sup>土器<sup>どき</sup>が見つっています（写真20）。厨は、国府、郡家や寺院などに伴う厨房施設を意味しており、調理されたものは、儀式や祭祀のために利用されました。「厨」銘墨書土器の存在から、付近に厨房施設が存在していた可能性が考えられます。

1998（平成10）年から調査の行われた千代南原遺跡第VII地点（17）の調査は、台地南側の低地部分で行われました。低地部は水分の多い低湿地のような環境であったた



写真20 千代仲ノ町遺跡第IV地点出土墨書土器「厨」

めに、通常の遺跡では腐ってしまうような木製品が、良好な状態で見つかりました。中でも<sup>もっかん</sup>木簡2点は、県内で5遺跡目となる貴重な発見で、注目を集めました（写真21）。木簡に記された内容は、郡家や寺院に関係するもので、その存在の重要な証拠となるものでした。

また、その他の出土品も土





写真21 千代南原遺跡第Ⅶ地点出土木簡（実測図：1/6）  
（図：小出ほか1997）

器や木製容器などの日常的な生活用具のほかに、都との共通性も指摘される儀礼用の木製祭祀具や、鑄造遺物、農器具、紡績具など、当時の人びとが寺院の周辺で行った幅広い活動を想像させるものです（写真22）。これらの出土品から千代の周辺には、儀礼的な場所のほかに、鍛冶工房や織物類の生産の場などがあったことや、低地の水田で耕作が行われていたことなどが明らかとなり、当時の千代の社会の様子を具体的に語れるようになりました。



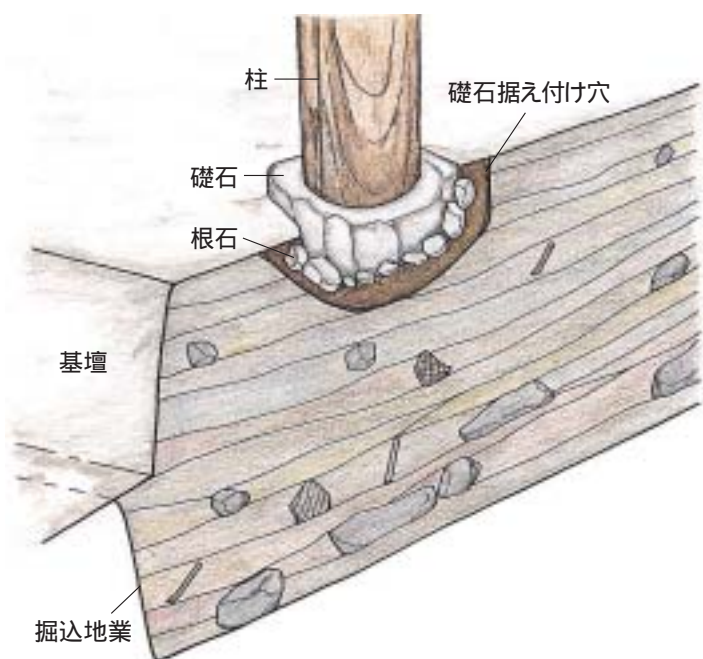
写真22 千代南原遺跡第Ⅶ地点出土祭祀具（ささら棒、斎串、形代（鏃形・刀子形）、琴柱型木製品など）  
（小出ほか1997）



写真23 千代南原遺跡第ⅩⅤ地点出土灯明皿（盤古堂考古学研究所提供）

また、2004（平成16）年には、千代南原遺跡第X V地点（26）の発掘調査が行われました。この地点は、金堂の推定地に位置していたため、寺院の建物跡の検出が期待されましたが、それを明確にできる遺構は検出されませんでした。しかし、瓦のほかに、9世紀後半から10世紀前半の土師器坏類が大量に見つかっています（写真23）。これらは、<sup>すす</sup>煤やタールで黒変しているものがほとんどで、寺院内で<sup>まんどうえ</sup>万灯会などの祭祀に用いられた<sup>とうみょうぐ</sup>灯明具であったと考えられています。

これらの発掘調査によって、寺院周辺の様子が次第に明らかになる一方で、2006（平成18）年に行われた千代南原遺跡第X X IV地点（30）の発掘調査で、寺院の主要建物跡の基礎と大型の柱穴1基が初めて確認されました（第11図・写真24）。最初の発掘調査から約半世紀が経過する中での待望の建物跡の発見で、千代寺院跡の実態解明の大きな一歩となりました。



第11図 基壇築造模式図



写真24 千代南原遺跡第X X IV地点の掘込地業跡

検出された基礎には、地面を一度掘り下げ、土を埋め戻す<sup>ほりこみじぎょう</sup>掘込地業と呼ばれる地盤改良工事が行われていました。埋め戻しの際には、土を少しずつ層状につき固める<sup>はんちく</sup>版築という技法が採られ、さらに強度を強めるために、瓦や川原石が埋め込まれていました。このようにして、瓦葺きの重たい建物に耐えられる地盤を整備したようです。建物の基礎は、本来は<sup>きだん</sup>基壇と呼ばれる

（この部分は前の段落の続きとして、上記のTextブロックに統合されています）

周囲より一段高い土台であったと考えられます。この基壇は、神奈川県内では5例目となる寺院基壇の検出で、千代の寺院建物の痕跡を初めて明らかにした大変貴重なものです。

基壇の造られていた場所は、江戸時代には石塚と呼ばれていた場所で、かつて礎石が多数あったことが指摘されています。基壇の範囲は、南北13m以上、東西17m以上であることが明らかになっています。

千代寺院跡は、研究の開始は早かったものの、現在も実態解明が進められている状況です。ようやく発見された建物跡も、金堂・塔・講堂のどの建物に相当するかは、現段階で確定していません。千代寺院跡は、県内の古代史を解明する上でも重要な遺跡です。今までの研究成果を見直し、また、今後も研究を進めていくことで、足柄平野に生きた古代の人びとの営みが、より一層明らかなものになるでしょう。

#### 4 千代寺院跡の瓦

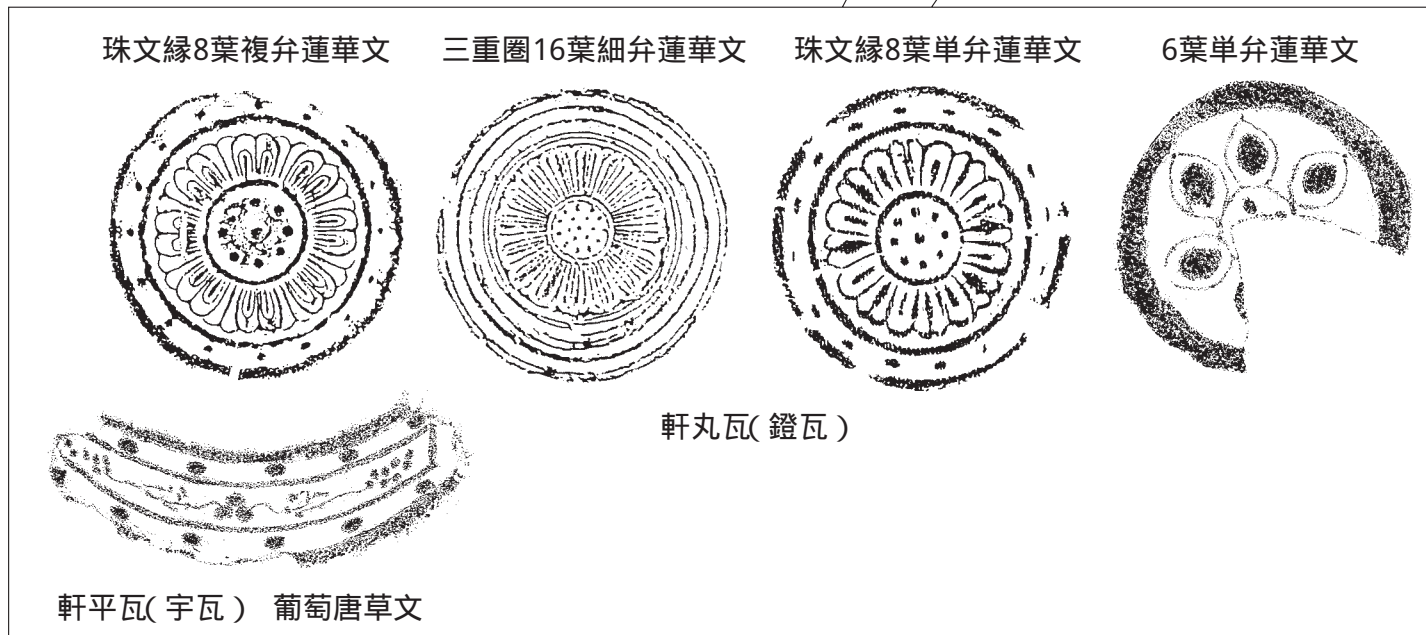
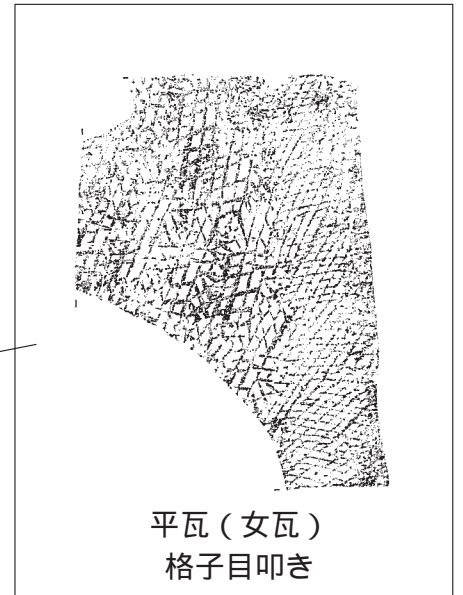
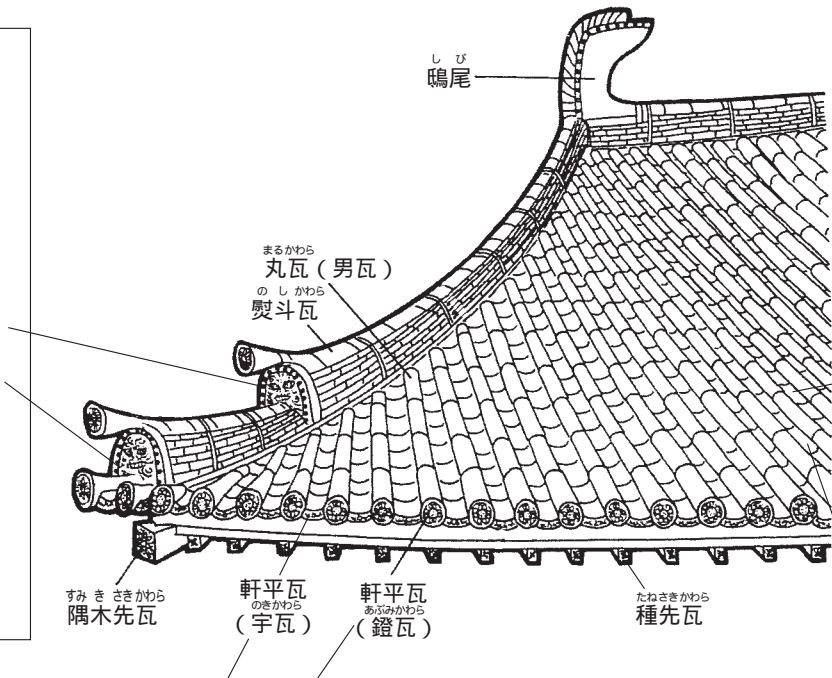
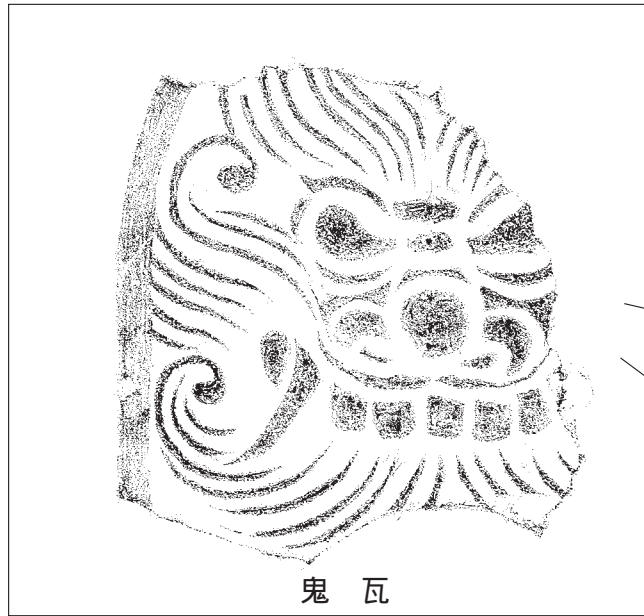
千代の発掘調査では、寺院跡の存在を示すもののひとつとして、千代北町遺跡第XⅢ地点(32)など多くの地点で古代瓦が出土しています(写真25)。千代の古代瓦の研究は、河野一也や國平健三、前場幸治らによって進められ、寺院の創建時期や系統の検討が行われてきました。

瓦には、用いられる場所や用途によって、いくつかの種類があります(第12図)。千代では、軒先から棟に向かって葺く「平瓦(女瓦)」、平瓦どうしの接続部分をふさぐ「丸瓦(男瓦)」、それぞれの瓦当部を分厚く発達させ、文様を施し、軒先に用いた「軒平瓦(宇瓦)」と「軒丸瓦(鏡瓦)」、屋根の軒端を飾る「鬼瓦」などがみつかっています。

千代寺院跡の瓦は、軒丸瓦の瓦当部の文様や、平瓦の製作時に用いられる叩き具の跡の違いなどから、数種類のものがあることが知られています。このうち、もっとも古い



写真25 千代北町第XⅢ地点瓦出土状況



第12図 千代寺院跡出土の瓦と名称 (神奈川県立博物館編1984を参考に作成) (縮尺不同)

創建期のものと考えられる軒丸瓦や軒平瓦は、奈良県の山田寺、川原寺などの系譜を引き継ぐものです。これらの瓦は、1968（昭和43）年に東名高速道路の建設中に発見された、松田町のからさわ瓦窯<sup>がよう</sup>で出土しています。このことから、千代寺院跡創建期の瓦は、からさわ瓦窯で生産されていたことが明らかになりました。一方、改修期の瓦は、相模国分寺や横須賀市にある古代寺院、宗元寺との関連が指摘されています。

千代中学校の校庭造成の際に発見された鬼瓦は、武蔵国分寺のものと同じ型から作られたことが指摘されています。このことから、千代寺院跡が単なる一地方の寺院であったというよりも、瓦の供給ルートなどで、他地域の寺院とも関係をもった寺院であったことが指摘されます。

このほかに注目される瓦としては、ヘラ書きの文字がある平瓦があり、「石田一斗加沙八升」と書かれています。粘土と、そこに加える砂の割合を示していると考えられています。瓦の製作技法を明らかにする興味深い資料です。

また、瓦塔<sup>がとう</sup>の破片が見つかっています（写真26）。瓦塔とは、塔を模した小型の焼き物で、塔の代わりとして造ったもの、あるいは堂内に安置<sup>あんち</sup>して信仰の対象にしたものなど、その目的は諸説あります。このほかに仏像の螺髪<sup>らはつ</sup>や粘土板に仏像を彫刻した埴<sup>せん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>も見つかっています。発掘調査では、千代南原遺跡第Ⅲ地点（6）と千代北町遺跡第Ⅶ地点（15）で焼成レンガである埴<sup>せん</sup>が見つかっています（写真27）。埴には葡萄唐草<sup>ぶどうからくさ</sup>文が描かれており、寺院の基壇や仏堂内の装飾に使われたものだったのでしょうか。これらの遺物は、千代寺院跡の様子を現代に伝えてくれる貴重なものです。

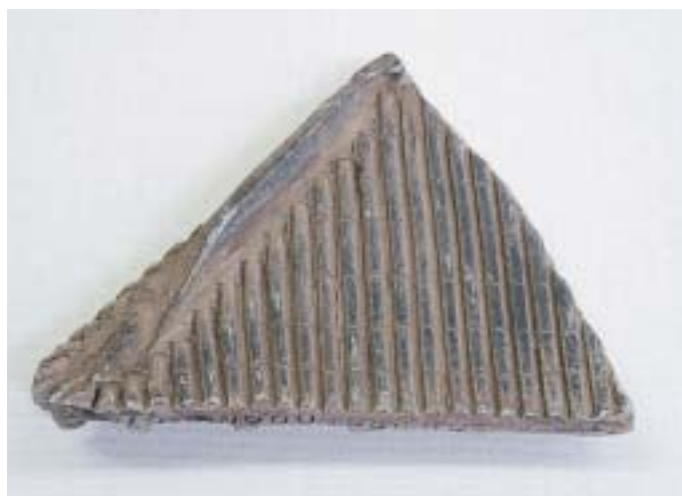


写真26 千代南原遺跡出土瓦塔



写真27 千代南原遺跡第Ⅲ地点・千代北町遺跡第Ⅶ地点出土埴

## VI 千代の中・近世

### 1 農村のくらし

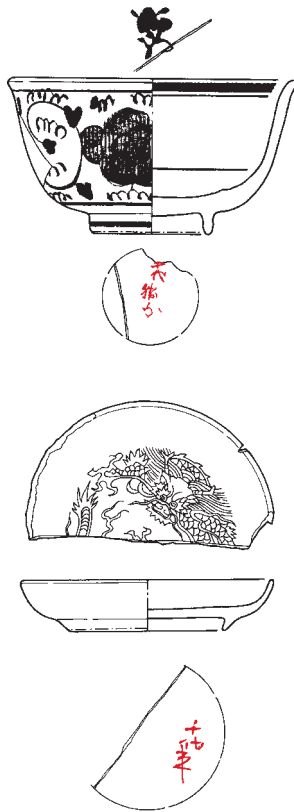
千代は、寺院が廃絶された後、畑としての土地利用が進んでいったようです。

中世の様子は、発掘調査による資料が乏しいため、あまり具体的に分かっていません。台ノ塚（3）は、発掘調査で五輪塔と人骨が出土していることから、墓地あるいは供養の場として使われていたようです。また、千代東町遺跡第Ⅱ地点（19）では、16世紀代の地下式坑が1基検出されています。倉庫などの貯蔵施設の可能性があります。しかし、はっきりとした機能は分かっていません。

近世では、千代南原遺跡第Ⅴ地点（9）や千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点（14）の調査で、建物に関連する施設や畑の耕作痕などが見つかり、18世紀のはじめには、農村として土地利用が行われていたことが明らかになっています。

それでは、最後に「千代」の地名が確認できる考古資料を紹介しましょう。千代南原遺跡第Ⅴ地点では、出土した19世紀の磁器の中に、<sup>やきつ</sup>焼継ぎを行っているものが見つかり、<sup>しらたま</sup>焼継ぎとは、白玉と呼ばれるガラス質の接着剤を熱で溶かし、破損したやきものを接合する技法で、江戸時代に開発されたりサイクル技術といえるものです。

出土した資料には、朱書きで高台内に「千代」の地名と所有者の名前と思われる判読不明の文字が記されています。焼継ぎ職人が発注者を識別するためのものであったようです。焼継ぎの資料は、小田原城下でも多数出土していますが、農村部である千代にも焼継ぎ職人が浸透していたことは、注目されます。



第13図 千代南原遺跡第Ⅴ地点  
出土焼継資料  
(佐々木ほか2004)

## 文献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。千代遺跡群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 岡本孝之 1998 「千代寺院跡の研究史的復元」『神奈川考古』第34号、神奈川考古同人会、181-206  
1999 「千代寺院跡の再検討」『小田原市郷土文化館研究報告』No.35、小田原市郷土文化館、1-20
- 神奈川県立博物館編 1984 『神奈川の古瓦』
- 呉地英夫ほか 1999 『千代東町遺跡第Ⅰ地点発掘調査報告書』千代東町遺跡第Ⅰ地点発掘調査団
- 小出義治ほか 1997 『千代南原遺跡第Ⅶ地点』小田原市東千代特定土地地区画整理組合・千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団
- 河野一也 1993 「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅳ）」—相模国足下郡千代廃寺の古瓦を中心として—『神奈川考古』第29号、神奈川考古同人会、83-107
- 佐々木健策ほか 2002 「千代字仲之町135-2外における試掘調査」『平成11年度試掘調査』小田原市文化財報告書第90集、小田原市教委、38-44  
2004 『千代南原遺跡第Ⅴ地点』小田原市文化財調査報告書第119集、小田原市教委
- 島崎麻理ほか 2006 『千代吉添遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第137集、小田原市教委
- 杉山博久 1984 「小田原市千代光海端遺跡」『西相模における古式土師器の研究』（資料編Ⅰ）、小田原考古学研究会、49-114
- 諏訪間順ほか 1987 『千代南原遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第22集、小田原市教委  
2001 『千代北町遺跡第Ⅷ地点』小田原市文化財調査報告書第87集、小田原市教委
- 前場幸治 1993 『古瓦考』〔相模国分寺千代台廃寺〕、冬青社
- 田尾誠敏 1999 『相模国のはじまり』東海大学校地内遺跡調査団
- 滝沢 亮ほか 2003 『千代北町遺跡第Ⅴ・Ⅵ地点 千代仲ノ町遺跡第Ⅱ・Ⅴ地点 千代南原遺跡第Ⅵ地点 高田宮町遺跡第Ⅱ地点 国府津舞台遺跡』小田原市文化財調査報告書第113集、小田原市教委
- 渡辺千尋ほか 2007 『千代南原遺跡第ⅩⅠ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地点』小田原市文化財調査報告書第145集、小田原市教委

小田原の遺跡探訪シリーズ3

### 千代遺跡群

—千代台地にひろがる原始・古代の遺跡—

平成20年3月14日 印刷

平成20年3月21日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1717

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: [bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp](mailto:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp)

印刷 株式会社アルファ

